

公害研究クラブの活動報告

徳 井 輝 雄

1) はじめに

本校で1973年(昭和48年)に必修クラブが導入されて今年(1980年)で8年目を迎える。公害研究クラブはその当初から7年間開設され続けた。(今年は、希望者が一人になったため開設されていない。)ここにこの7年の活動の主なものを記録し、今後の資料の一つにしたい。この記録では、まず必修クラブ導入当時の背景およびそのとらえ方について述べ、さらに、公害研究クラブ開設の動機、その運営方針、活動内容の具体例、について述べ、最後に今後の為の課題と関連資料をつけておく。

2) 必修クラブの性格

1973年(昭和48年)にさまざまな問題点が残されていたにもかかわらず、本校でも大勢に従うというなくずしむードの中で、必修クラブ導入に踏み切った。その時の教師集団によって決められた方針は、評価はつけない。教師の開設希望の範囲内で、生徒に選択してもらう。(開設の為の最底人数はなるべく設けない、たとえば希望者三人でも開設する。希望者の多すぎる場合は第二、第三希望にまわってもらう。)国からの予算的裏付けを得るように働きかける。などというものであった。

この必修クラブ導入を行政側が促してきた背景には次のようなものがあった。1. **部活動をめぐる諸問題**。たとえば、顧問教師の負担過重、施設・設備の不足、体育系におけるケガにまつわる責任問題、指導員や専任コーチの定員化や人件費。2. **現在の教育状況への反省**。たとえば、受験教育や詰めこみ教育をもう少し緩和してゆとりを学校教育の中にもたせる事は出来ないか。3. **生徒の多様な部活動への要求や、活動内容の同好会的傾向**。これらの問題を行政側から解決しようとして打った手の一つがこの必修クラブであった。(最近のゆとりの時間特設もこの続篇といえよう。)教師側からの部活動指導に関する要求には、必修クラブ導入によって部活動の社会教育への移行というムード作りをすることでこれに応え、さらに、生徒や父母からの詰め込み教育反対論には、クラブ活動の正課時間内での設置で応えたのである。施設・設備の不足や指導員不足の下での必修クラブの設置は、必修クラブの

方向に賛成する者の中にも安易すぎるという批判があったのをはじめ、生徒会指導の立場からは、管理主義的教育体制の中にあつてわずかに残された生徒の自主的活動分野さえ管理下にくみ込むという要素をもつ事に強い不満が表明されていた。事実その後、必修クラブの導入が従来の部活動を衰退させる原因の一つになったことは本校でも確認されている。また囲碁や将棋、トランプ等の娯楽的要素の導入は、必修クラブで「遊ぶ」のは良いが、普通の休み時間に「遊ぶ」のは良くないという「指導」を生み出し、「生活」指導に新たな問題を提出している。このように管理された「遊び」では、受験体制下の詰め込み教育を補完する単なる息抜き時間(大人でいえばパチンコやマージャン)的存在という消極的側面さえ十分発揮できないといえよう。

発足の前年に行政側の組織した教育課程研究委員会が指摘した問題点として、1. **クラブ設定基準**。生徒の興味の多様化と施設・設備・教員定数からくる制約条件の存在。2. **指導者の問題**。外部からコーチや指導者を招いた時の費用、指導者の研究と準備の為の教員の受持時間数の問題。3. **備品・運営費の出どころ**。の三つがすでに挙げられていたのである。

しかしそれにもかかわらず文部省はその指導要領(高等学校学習指導要領第3章第2款第3クラブ活動)で、学年やホームルームの所属をはなれて共通の興味や関心を持つ生徒をもって組織することをたてまえとして……教師は平素から生徒との接触を密にし、好ましい人間関係を育てるように配慮すると共に、適切な指導の下に生徒が自主的自治的な活動を展開しようように努める必要がある。各教科・科目の単なる補習、一部生徒を対象とする選手養成などの為の活動としない……等々を期待していた。さらに「全生徒がいずれかのクラブに所属するものとする」としていたが、この事は、本来趣味的な内容やレクリエーションの内容をも盛り込み自主的活動・自治的活動を期待しながら、その参加は「強制」であり、しかも施設・設備・指導者の関係で選択の幅は非常に限られてしまう為イヤイヤの参加者が出るという自己矛盾を生み出している。

では当時当の生徒達はどう思っていたであろうか。導入直前(1972年11月)の本校でのアンケートでは次のようであった。必修クラブ導入に賛成する者、中学62%、高校39%、またそれにとまなう部活動自由参加

制にする事に賛成する者、中学62%、高校60%、であった。また導入後四ヶ月後の調査（本校生徒の新聞進路77号 1973年8月16日付）では、必修クラブ賛成85%、その理由；今までにない変った事ができる。先生との会話ができる。他学年の者と話ができる。ゲーム的要素があって面白い。必修クラブに反対 12%、その理由；全然おもしろくない。たゞの遊びだ。やる気のない者をひっぱり出してもしかたがない。必修クラブの問題点、時間が一時間では足りない。設備不十分（体育系）、指導者の力不足、部活動参加者が減少。

現状はこの時の状態が続いているとあって良い。さらに教師の側からの分析を加えるならば次のような事がいえる。1. 必修という事から本来の自主活動にある生気が今一つ足りない。やらされているという面があり自主活動には距離がある。2. では授業に比べてはどうかと言えば、クラブという事で安易になり準備不足になりがちである。体育系では、クラブの中途半端な性格が、授業や部活動に悪影響を与えているという指摘がある。すなわち、たとえば、バドミントンという同一種目において、必修クラブでの活動は、部活動や、授業での活動とどういう関連づけとどういう区別を教師が意識的に生徒に指摘していくのかという問題を含んでいる。

3) 公害研究クラブの活動

必修クラブ導入に当って、これを次のように促えた。
1. 生徒の自主的活動の場としてとらえる。2. 超教科的総合学習の場としてとらえる。3. 超学年の特色を生かす。

では公害研究クラブ開設の動機は何であったか、それは外でもない、必修クラブの時間を公害教育の実践の場として活用する事であった。当時筆者はすでに公害教育についての試みを行っていたが（本校紀要第19集 P100 1973）その課題の一つは公害教育実践の場をどこに設置するかにあった。まさに必修クラブの導入は渡りに舟であった。

公害研究クラブの運営方針は上記1～3の立場をとりつつさらにその内容については、公害教育を実践するという観点から次の点に留意した。単なる教室の知識教育になる事を避ける。現場見学や、公害反対の住民運動をしている人達の話も聞く。ようするに公害現場のナマの空気をなんらかの方法で反映させるという事である。実際の指導では、これらの方針や留意点の実行は困難であった。たとえば生徒の自主的な活動を育成するという方針は、テーマ選択に当ってはがゆい面をもたらした。生徒の一面的一時的な興味に依拠しつつ多面的持続的興味へもっていくテーマの選定が思うようにならなかった。研究調査の方法や内容もなる

べく自分達で考えさせた。また公害現場のナマの空気を反映させるという留意点に至っては、週一回のしかも一時間の正課時間内ではとうてい実現できないものであった。自作の8mmフィルムやスライドを時々見せる位であった。クラブとして全員で校外に出たのは七年間で5件であった。（資料参照）それは春休み、夏休み、日曜日を使ってのものである。

以上の事柄すなわち公害研究クラブ運営上での困難点をまとめれば、1. 生徒の興味や関心の持続するテーマの提示。2. 週一回一時間という制約をどう克服するか。すなわち、生徒の興味や関心が次第に高められていく事が遅く、あついうちに鉄をたたく、という事ができない点。3. その為単なる知識教育を避ける上での諸方策がとりにくい。

とくに1のテーマ選択についてさらに分析を加えるならば、個別的テーマとクラブ全体としてのテーマとの結合。系統的持続研究と公害につきものの時事性との結合等が重要である。時事性は公害事件の裁判等が行われた時に投げ入れ的に教師の側から行われた。しかしこれは、系統的持続研究の中断をもたらした。

〈公害研究クラブの実際〉

新学期初めには、テーマを見つけさせるが、中学一年生等公害に対して初歩的な知識さえないものには、上級生（中学三年生や高校生）が解説をしたりわかりやすい本を紹介したりする。テーマは一人一テーマになったり数人で共同テーマを追求したりするが、概して学年別や男女別のグループができることが多い。次にそのテーマに即して文献調査をする。最初とりついたテーマがむづかしくて難航する時もある。この研究調査はどうしてもデスクワークが多くなる。現場調査は、休日にしかなできないからだ。

文化祭には各自がまとめた成果を発表する。内容が堅い為參觀者は殆んど無い時もあった。この事がメンバーの意欲を衰えさせた。

1978年と1979年には全員で朝顔による大気汚染の検出を行った。これは全員を一つのテーマに結びつける全体討議の機会を作ったか、各自のテーマ追求を中断させる事にもなった。

1974年（昭和49年）に中学に入学し、1980年（昭和55年）に高校を卒業した二人の男子生徒（A、Bとする）の6年間の活動の主なものを次に記しておく。

1974年（昭49） 中1

- A、B共に他の中1の1人と共に海の汚染調査を河和で行う。
- A、B共に中2のメンバーと共に食品添加物の合成着色料等の分析（定性）実験をする。
- A、B共に中2のメンバーと共に騒音の測定をする。名古屋市内の新幹線沿線や小牧空航に出掛ける。

1975年(昭50) 中2

- 名古屋市のゴミ処理場を見学、その報告を文化祭で行う。
- A、大気汚染・工場排水の実態調査に市内港区等へ出掛ける。
- B、中3のメンバーと共に食品公害について調べる。

1976年(昭51年) 中3

- A、大気汚染の測定法について調べる。電動ポンプ、抵抗測定器を設計製作、文化祭で展示。
- B、新幹線公害について調べる。名古屋地裁での新幹線公害訴訟を傍聴、住民側代表者とも話し合う、この結果を文化祭に発表。
又農薬及び食品添加物について調べる。

1977年(昭52年) 高1

- A、53年規制に対する各自動車メーカーの排気ガス対策方法の調査をする、文化祭で発表。
- B、農薬及び食品添加物について調べる、文化祭で発表。

1978年(昭53年) 高2

- A、B、他の二人と共に公害に関する8mm映画の製作準備。
- A、B、全メンバーと共に、朝顔による大気汚染検出を行う。これは失敗する。

1979年(昭54年) 高3

- A、B、他の一人が公害(地盤沈下)に関する8mm映画を製作するのを助ける。
- A、B、全メンバーと共に朝顔による大気汚染検出。特にBはこの活動の中心である「伊勢湾一帯の朝顔被害を観察する実行委員会」の中心となっている三重大学農学部との連絡役となる。
- A、公害関係文献目録の作製
- B、近鉄四日市駅付近の架線の摩耗状況から四日市の大気汚染の実態を調査しようとしたが、時間不足で出来ず。

A、B共に高三になってからは、大学入試の為、あまり公害研究には打ち込めなかった。

〈今後の課題〉

1. 公害研究のイメージチェンジ。公害現象を直接扱う事のほかに、公害を生み出している価値観に迫るもの、新しい科学技術体系を模索するものをテーマとして考える。それには、社会科学、自然科学の広い領域にわたってテーマを見つけ、テーマそのものは、的を絞って狭い範囲とし、中・高校生が取り組みやすくする。
2. 長期予定を立て、六年ないし三年連続研究の可能性を生かす。テーマとして、環境変化の調査を動植物の観察を通じて把握すること等が挙げられ

る。

3. 超学年の良い点を生かすため、部活動的要素を取り入れ、クラブ全体の運営を生徒にも行わせ、2と関連して、クラブの伝統的研究をルーチンワーク的に行うことによりメンバーのまとまりと、上級生のリーダーシップ発揮の機会とする。
4. ゆとりの時間が設けられるのを機会に、これを必修クラブにとり組むことにより時間的制約を緩和する。又これを機会にクラブを部活動と結合してしまう事も考えられる。いずれにせよ、これらは全教師間での討論が必要である。
5. クラブ活動を必修として位置づけるには、それなりの裏付けとして、教師の準備の為の時間を確保する必要がある。受け持ち時間の軽減や教員の定数増が望まれる。

4) 資 料

① 公害研究クラブ員数ととり上げたテーマ

1973年(昭48) 3名(前期) 4名(後期) 山崎川の汚染状況調査。PCB汚染について。学校の便所の改良案。

1974年(昭49) 3名(前) 5名(後) 海の汚染状況調査。食品添加物の分析。名大内鏡ヶ池の水質検査。騒音測定法の研究と測定。

1975年(昭50) 11名(前) 10名(後) ゴミ処理について。大気汚染、工場排水の検査法。農薬について。足尾銅山鉱毒事件。食品公害。庄内川の汚染調査。大阪国際空港訴訟第一審判決について。

1976年(昭51) 9名(前) 5名(後) 新幹線公害。足尾銅山鉱毒事件。庄内川汚染。農薬汚染。大気汚染測定法。大阪国際空港訴訟。原子力発電と公害。食品添加物。水質汚染。

1977年(昭52) 11名(前) 9名(後) 原子力発電と公害。食品公害。東名高速道路の騒音と大気汚染。53年度規制に対する各自動車メーカーの排気ガス対策。公害病。

1978年(昭53) 6名(前) 7名(後) 大気汚染について。ジュース類の合成着色料の検出。紙について。公害に関する8mm映画の製作。

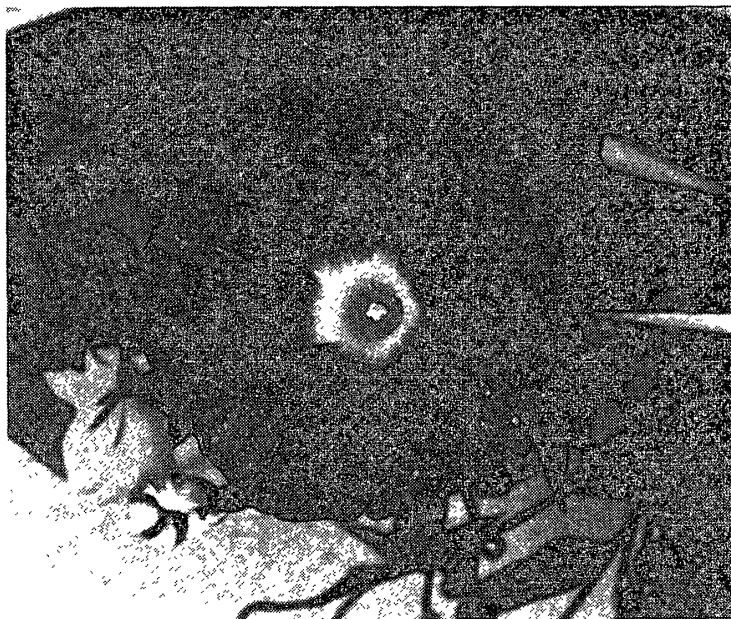
1979年(昭54) 8名(前) 8名(後) 紙について。公害に対する本校生徒の意識調査。公害(地盤沈下)に関する8mm映画の製作。朝顔による大気汚染の検出。水質検査。原子力発電と公害。公害関係文献調査。近鉄四日市駅付近の架線の摩耗状況。

② 公害研究クラブの一年の活動状況例

1973年(昭48) 5月、3名で発足。山崎川の汚

染状況を調べる事にする。6月、調査の為の準備と検出方法の研究及び練習。7月、測定箇所を選定。夏休み、現地調査、三日間を要す。9月、文化祭への準備。10月文化祭で発表。11月、学校内の公害、学校の便所をみてまわり汚れにくい便所の構造を考える。1～3月不活発。

- 1974年（昭49）** 4月、名大構内の巡検。5月、公害に関する文献調査。6月、海の公害について調査する方法を考える。7月、準備。夏休み、名古屋港、野間、河和へ出掛ける。10月、食品添加物の検査方法の調査。11月、検出実験。12月、水質検査の予定作り、1月、水質検査実験。2月、騒音測定の方法とその予備実験。3月、春休みに二日間で名古屋空港と新幹線の調査。
- 1977年（昭52）** 4月、各自のテーマ決め。5月～6月、地盤沈下、原子力公害について投げ込み教材的に話をする。スライド等も使う。9月、夏休み中の出来事について話をする。文化祭の計画。筆者が中国を友好訪問したので、北京や上海でも大気汚染が起りつつある話をする。10月、文化祭の準備と文化祭での発表。11月、文化祭での発表の反省。12月、名古屋の公害について列挙。1月、公害の検出と動植物。2月、松喰い虫のはなしを投げこむ。PCB（カネミ油病）裁判判決について投げこむ。
- 1979年（昭54）** 5月、朝顔（スカーレットオハラ）による大気汚染の測定に今年も参加する為その話し合い。三重大農学部へ手紙を出す。8



雨水によって出来た朝顔の斑点（1979. 8. 於蟹江 公害研究クラブ員撮影）

mm映画の製作準備。公害についての意識調査をする事にする。6月、朝顔の種をまく。テーマの決定とグループ分け。朝顔の発育状況の報告。10月、文化祭の準備とその実施。文化祭の反省。後期活動計画を立てる。11月、原爆について。12月、各グループ毎の研究調査。1月、原子力発電に関するアンケート。清涼飲料水の害について投げ入れ。2月、朝顔による大気汚染調査に関する

三重大農学部の報告の検討。

3月、各テーマ毎に調査結果の報告。

- ③ **本校必修クラブの講座名**（ ）内は登録者数
- 1973年 ソフトボール（73）、卓球（39）、バドミントン（37）、水泳（32）、バレーボール（36）、バスケットボール（36）、万歩（12）、園芸（3）、読書（8）、科学史（9）、旅行プラン（30）、オーティオ（20）
茶道（15）、美術陶芸（19）、コンピューター（21）、現代史（5）、ギター（14）、公害研究（3）
- 1979年前期 ソフトボール（74）、バスケットボール（40）、卓球（54）、バレーボール（55）、バドミントン（36）、弓道（40）、体操（13）、水泳（42）、読書感想文（9）、古典研究（17）、中世文学研究（28）、レクリエーション（34）、オーディオ（37）、クラシックギター（5）、公害研究（7）、仏像研究（10）、ロシア語（7）、E. S. S.（6）、社会問題研究（9）、紙芝居製作実演（37）、囲碁（45）、水石（4）、クロスオーバー（44）。